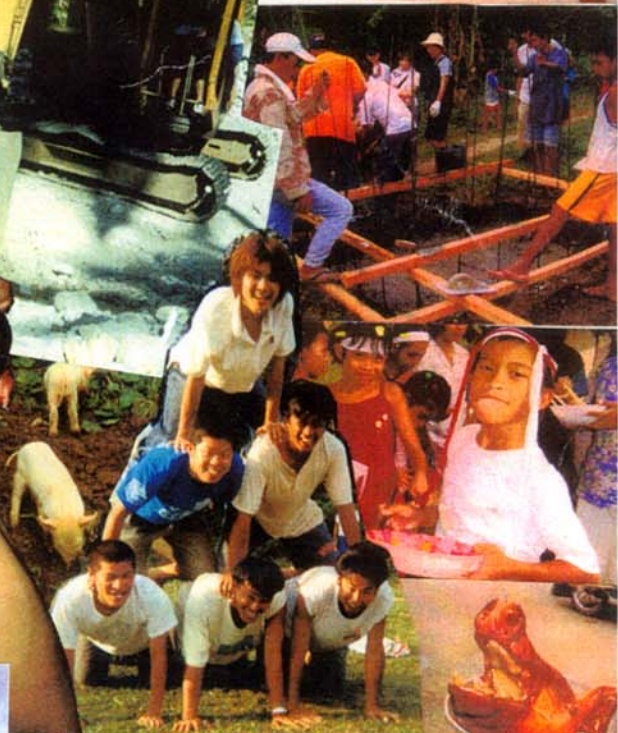
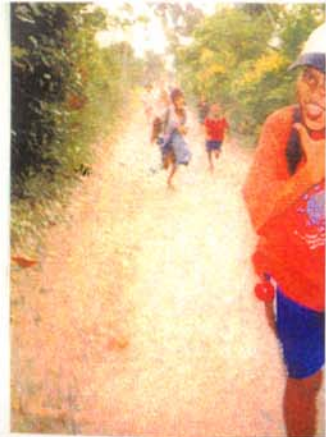


フィリピン Camp 2004



キャンパー紹介

誕生日順に、お互いを紹介しました。



尾村 沙也佳（さやか）…キャンプリーダー

英語が堪能で現地人との交渉やコミュニケーションなどで大活躍していた。なかなかまとまらないメンバーたちに苦勞していたけれど、様々な問題について、みんなで話し合う場を与えてくれたり、自分で考える機会を与えてくれたことは、とてもいい経験になった。（by もも）

小坂 仁都美（ひとみ）…最初の1週間のみ参加

彼女からまず連想するのは得意のカメラとコテコテの播州弁。姫路生まれ姫路育ちですが、大学時代にアジア各国を廻って写真を撮り続けました。フィリピンキャンプに参加したことがきっかけでなんとマニラに日本語教師として赴任することに！どうなるか楽しみです。

（by さやか）



五十嵐 崇博（いがちゃん）…ワークリーダー

キャンプですっかり成長。皆のために頑張ります！特技は魚の骨を食べること。なんでも食べます。ちょっと不思議です。感情表現が苦手だけど、実はたくさん考えていて、感情豊かだったり。どんどん成長していくいがちゃん、今後が楽しみ。

（by ひとみ）



長谷川 大輔（ダイスキ）

「リーダー役から黒子役まで、困った時には何時だって存在感を発揮してくれる頼れる存在。ここぞという時にくれるアドバイスが本当に心強かったです。」（by いがちゃん）



坂田 泰則（ヤス、鳥取）

のんだくれだったり、酔い潰れていたり、真面目だったり、アナウンサーだったり、メガネだったり、コンタクトだったり…でも一番なのは、彼女思いで友達思いの優しいヤツ（笑）大切にしていこう（by ダイスケ）

田中 佐代子（さよ）

係りをいくつも兼ねて忙しいにもかかわらず、できることがあれば何でもやろうとし、降りられなくても滝に登ってしまうほどエネルギーに満ち溢れ、いつも笑顔で活発な女の子。（by ヤス）



関 哲也（テツ）

はじめからやたらと落ち着いてどっしり自分を持っているのが印象的。そのわりに、マイペースな一面も。ミーティングでは、積極的に意見を出し問題解決と一緒に考え、キャンプをより良いものに作り上げていくことに貢献していた。教育に関して語りだすと熱くなる教師の卵。フィリピンより熱い教師目指してがんばってほしい！！（by さよ）

田中 三津子（みっこ）

みっこは話しやすくおもしろい！いろんなことに気づいて優しく接するし、意外と！？自分の考えをしっかり持っています。あと、海での犬掻きは犬もびっくりするほどうまいです！（by てつや）



柳沢 晶子（あっこ）

ホンワカしたとっても優しい雰囲気持っていて、でも以前マリー家で話したとき自分の意見を持ったしっかりした人だと思いました。特にあっこさんのオチヨウチヨウはかわいらしかったです☆（by みっこ）



林 尚徳（なおさん）

彼の周りは笑いが絶えないほど場の盛り上げ上手。しかし、単なる芸人ではない！キャンパーを気遣い支えてくれた優しいお兄さん。みんなにとって彼の存在はおっきかった！
（by あっこ）

土屋 美夏（つつちー、ミカ）

頑張り屋さん。縁の下の力持ち屋さん。ワーク中は医薬品係としてナースのお仕事をきちんとこなし、またほんわかキャラとしてみんなの疲れた心を癒してくれた合気道ガール。（by なおさん）



吉田 亮（おしょう）

ニカッと明るいい人です。いつでも堂々としていてすごいなぁと…周りに何気なく気遣いをしてくれる、そんな長所も備えています。あの頭は彼のチャームポイントです！
（by つつちー）

飯高 かすみ（タカちゃん）…会計

その愛くるしい笑顔で前回、今回とキャンプでは村の若者からモテモテであったが、なぜかオファーを頑固として断り続けている。会計という役目で厳しく金銭関係を管理し、みんなのお財布を常時、悪い人から守ってくれました。その計算された厳しさから今回キャンプで大きなミス、事故がなかったのはこのタカちゃんのおかげでもある。（by おしょう）



米川 晃司（よねじ、コウジ）

「どーでもいいや」が口癖。おだてられると弱いのかしょっちゅうバック転を披露していて、腕を痛めるなんてことも。村の女の子には大人気だった一方、常にテツや裕樹さんとできている!?と噂されていた。実は小学校の先生の卵。（by タカ）

森本 裕樹（ゆうき）

ゆうきさんははっきり言うと怠け者です。ワークをさぼったり、仕事もせずに遊んでばかりいたのもゆうきさんでした。そんな人ですがフィリピンに対する情熱は人一倍熱いです！そんなゆうきさんは僕は大好きです。（by よねじ）



潮田 広行（うっしー）

頭脳明晰で要領の良さ、世渡りの巧さにおいては右にでる者なしのリアリスト。そのため周囲からは薄情者と見られることもしばしば。意外とお茶目な一面もあるが、基本的にデリカシーに欠ける。（by ゆうき）

稲垣 彩（あや）

隠れ酒飲みキャラ。どんなにタンドゥアイを飲んでも平気。よくミッコとつつちーのお世話をした。物静かな人かと思いきや言うときは言う。冷静なツッコミが◎（by うっしー）



矢田 由美子（やっぴ、出雲）

いつも明るくてムードメーカー的であり、場を和ませる存在でもあったと思います。みんなに気を配ったり周りがよく見えていていろいろな場面でキャンプを支えていました。
（by あや）

間山 桃子（もも）

笑顔で明るいキャンパーの中での「にっこりリーダー☆」（なおさん調）ダンスパーティーでは引っ張りだこ。疲れていても踊り続けて、頼まれたら断れないタイプ!? 子供たちの人気者♪
（by やっぴ）



フィリピンについて

基礎情報

・フィリピン共和国 Republic of the Philippines
面積：299,404 k m²
人口：7,650 万人
首都：マニラ（人口 993 万人）
人種：マレイ系が主体。他に中国系、スペイン系、及びこれらとの混血、少数民族
言語：公用語は英語とフィリピン語 80前後の言語がある。
宗教：国民の83%がカトリック、その他キリスト教が10%、イスラム教 5 %
平均寿命：男性65歳、女性70歳
識字率：93.9 %
大学進学率：約30%
略史：1521年マゼランのフィリピン到着
1571年スペインの統治開始
1898年米西戦争中の 6 月12日アキルド将軍が独立を宣言 米の統治開始
1935年独立準備政府発足
1942年日本軍政開始
1946年 7 月 4 日、フィリピン共和国独立
1965年マルコス大統領就任
1986年 2 月革命によりアキノ大統領就任、マルコス大統領亡命
1992年ラモス大統領就任
1998年エストラダ大統領就任
2001年アロヨ大統領就任



ナガ村について

場所：フィリピンの中部セブ島の東、レイテ島の西部アルバーラ市のティナガン地区
人口：直径約、2キロ四方に約50世帯が居住
生活：基本的に早寝早起き 5時起床ー9時就寝。トイレは各家に装備（便座なし）家電製品はあまりない。時々、停電が起こる。
主食：米中心、他には魚が多い。野菜や肉などは少なめ（貧富の差による）
就職：定職についている人はごく僅か。不定期であったり、職がない方が多い。
言語：主にビサヤ語、村人にはビサヤ語とフィリピン語しか話せない者も多い。
賃金：現地での教師の給料は1日約 250 ペソ、村人の給料はそれ以下の場合が多い。
年齢層：子供（高校生まで）か、その両親、祖父母が多く居住している。20代の若者はほとんど見かけない。（都市部へ出稼ぎに行っている場合がほぼ）
教育：幼稚園はある。小学校は村より約2キロ先のティナガンにある。高校はティナガンの隣、ダブラハン地区にある。学校不足のため午前と午後と二交代制になっている。
環境：山の中に点在。舗装などはされていない。
医療：村に医療施設はない。アルバーラ市中心部に小さな施設があるが、村人はほとんど使用しない。（高額なため）
商店：商店（サリサリ）は村に5つ点在。

ワーク計画

～タンク編～

村の水道状況

前回のキャンプで初めて貯水タンクと蛇口を作り、井戸水や湧き水での生活が続いていた村にウォーターシステムが機能するようになった。しかし広大な村全域に水を供給するにはまだまだタンクの貯水量が足りないために蛇口からの水も出たり出なかったり不安定で、タンクの増設が求められていた。



作業手順

- 1、コンクリートブロック、セメント、スチールバー等を、崖を上った先にある作業現場へ運ぶ。
- 2、基礎工事のため草木を刈り取り、地面を平らに整備する。



- 3、コンクリートブロックを積み立ててセメントで固定する。
- 4、外部、内部、天井部をセメントでコーティングし補強。
- 5、水道パイプを接続して完成。



村人の生活に欠かせない水道環境の整備とあって彼らの関心も高く、前回以上の強い参加意識を見

せてくれた。夕方になると学校帰りの子供たちも駆けつけて場を盛り上げてくれた。この計画が彼らのニーズに適っていることを実感でき、しかもただ単に彼らの生活水準を向上させるための労働ではなく、彼らと笑顔のキャッチボールができるツールともなっていたことで、僕は村人たちのパワーをダイレクトに受け止めることができた。



2個目のタンクを作ったことで明らかに蛇口から出る水の勢いも増し、より彼らの生活環境が改善されたと思われる。さっそくこのタンクに備え付けられた蛇口を使って水浴びや洗濯をしている村人たちを見て、この計画の確かな達成感を得られた。今後このウォーターシステムが村人たちによって維持管理され、水の供給が円滑に

進んでいくことを願っている。

～釣り橋編～

滞在地ナガからハイウェイへと続く道の途中に大きな窪地がある。そこは雨期になると大雨で上流から水が押し寄せて増水し、大人が泳げるくらい水位にまで達する。窪地を越えた先にある小学校に登校する子供達は、そのような場合学校には行けず村で足止めとなってしまう。そこで窪地から水がひいている乾期の内に釣り橋を作ることが今回の計画である。

作業手順

- 1、窪地の両サイドに深さ150cmの穴を掘る。
- 2、それぞれに4本ずつポールを埋め込み、セメントと岩で固定する。



- 3、ポールにスチールバーを挿入し、溶接して固定する。

- 4、足場となる木板を並べてボルトでバーと固定する。
- 5、転落防止用のロープを張って完成。



ボールの切断、溶接などを除けば、全体的に素人の僕らにでも容易に取り組める作業が多かった。現地の人人やLSU学生の協力のおかげで順調に工程は進み、時に他愛ない雑談や冗談を楽しみながらの和気藹々とした雰囲気の中、日本人とフィリピン人の交流も深まっていった。最後には職人さんがゆっくりと作業方法をレクチャーしながらよりわかり易く進めてくれたので、皆の充実感も高まったものと思われる。完成した橋はさっそく子供たちの遊び場(?)となっていた。雨が降らずともゴツゴツした岩が転がり危険だった窪地のうえに橋がかかり、大人も子供も安全に通行することがで

きるようになった。思っていたよりもしつかりとした強度のものが出来上がり、雨季の氾濫時に大いに活躍してくれること期待している。
(五十嵐 崇博)

ワークについて

今回のキャンプも、前回に引き続きナガで行われた。キャンプに参加する前の段階で、前回のワークによって、これまで一切の水道システムが無かったナガに貯水タンクを建設し、村の約半分の領域に水を供給することができたが、未だに水の供給が不十分な地域も多く、時間帯によって水が出たり出なかったりと不安定な状況だということを知っていた。「水の生活か」。実際どんな感じなんだろうな。「日本では水道の蛇口はどこにでもあるし、ひねれば当然のように水は出てくる。もちろん、「水は大切なものだ」という意識は自分の中にあつたことはあつたが、正直そこまで真剣に「水」について考えたことはなかった。「水か」。現地の人たちは水とどんなつきあい方をしているんだろう。「てか、一体どうなってるんだ?」「そもそも、現地の人たちの生活が便利になるために……って現地の人たちは本当にそこまで必要としてんのかな。」「あれっ、水道システムつ

てどんな仕組みになってんだっけ!? 小学生の時、社会科見学したんだけどな。」「水道を自分の手で作ってみたい!」……。こんな感じで本当いろんな思いが込み上げてきた。結論「とりあえず行ってみよう。」

こんな思いで今回のキャンプに参加したから、「小学校訪問」とか「運動会」とか「流しそうめん」とかキャンプ中いろいろ企画があつたけど、自分の中で一番楽しみにしていたのはやっぱり「ワーク」だった(ホームステイも最高だったけど)。



ワークリーダーのイガちゃんを中心に、めっちゃくちや暑い日も、雨が降ってちよつと肌寒い日もあつたけど約10日間、日本人キャンプ、村人、LSUの学生、子



どもたちが一緒になって汗を流した。毎日「貯水タンク」グループと「つり橋」グループの二手に分かれて、同時に二大プロジェクトが進められた。ワークの序盤は、予想に反する日本製のシャベルカー「KATO」の大活躍や、LSUの学生が「頑張りすぎ」って言うくらい本当によく活躍してくれたおかげで順調に進んだ。日本人キャンプも慣れないながら、一生懸命ワークに取り組んだと思う。

途中、「村の職人とかLSUの学生に任せすぎ」っていう問題もあつたけど、みんなでしっかりと話し合つて、その後はみんな今まで以上に積極的にワークに参加した。「ポリポリ!?(代わろうか?)」「オケラ、オケラ!デシリ、デシリ!(大丈夫、まだまだっ)」「こんな会話が飛び交つてた。

(関 哲也)

生活について

食事や体をあらうこと、トイレのことやら日本とは全く違うと聞いていて不安だったけど、いざ行ってみると意外とすんなりフイリピンスタイルに適応することができた。逆に、日本に帰ってきたときにははともとの日本の生活に違和感を感じたくらい馴染んでいた程だった。行く前は鳥インフルエンザのことについて心配だったが、実際行ってみると村の中には鶏や豚が普通にたくさんいる環境だったので、鳥インフルエンザになっただけでしようがないと開き直り、村での生活を楽しんだ。とりあえず、みんな何もなかったようなので安心。

(坂田 泰則)

共同生活：村人から家を二軒借りて男女別々に生活しました。寝るときは別々で、食事・ミーティングは男部屋で行いました。夕食の後、それぞれキャンパーたちと語り合ったり、飲み会をしたりして仲を深めました。

トイレ：今回、先発隊がトイレを用意してくれていたのですが、とてもきれいにできていました。便座があり、囲いもある素敵なトイレです。通常フイリピンのトイレは便座がないので座るのは困難です。又、紙を使用しないので私たちは各自、トイ



レットペーパーを用意しました。ホームステイ先にもトイレレットペーパーはないので各自必要な人は持って行きなさいました。それからトイレに紙を流すとつまってしまうので、ゴミ袋に入れて処分をしていました。水はバケツに汲んで流します。

食事：4、5人の食事当番を決めて、夜・次の朝・昼を作ります。食事当番はキャンパーが交代で行い、今回参加したビスカの大学生にも一日作ってもらいました。食材は前日の昼間に、バスで30分ほどかかるオルモックかハイウェイのサリサリ（村の中にある個人経営の商店）で食材を調達します。よく1ペソで買えるパンが食



事にできました。どのパンもほとん

ど同じ味だった気がしましたが、あまり飽きず、日本に持ち帰った人がいるほど美味しかったです。ホームステイの時は、朝と夜はステイ先で作っていただき、お昼は通常通りキャンパーが集まって食



べていました。

(田中 三津子)

マリーゴ（水浴び）：現地の村の人は水道で、家に井戸がある家庭はそこで体を洗っていた。キャンパーの中にも水道で体を洗っている人がいたが、基本的にほとんどのキャンパーは川で水浴びをしていた。だが、ホームステイの時、家の人たちは「家に井戸があるのにどうして川まで行くのだろう」と思っていたらしい。この時期は乾季だったため水はほとんどなく、川という大きな水たまりを

みんなが共有して体を洗っていた。マリーゴのときに洗濯もしていたのだが、全部手洗いだだったので大変だったけど、普段日本では手洗いで洗濯しないのでいい経験になった。洗濯している時、近くにナナイ子どもたちがやってくる手伝ってくれて本当にその優しさがありがたかった。水浴びをした川は、広くて、周りは緑で何もないので開放的な気分を味わうことができた。夜はきれいな星空を楽しむながらマリーゴすることができた。ただ、夕方遅くなってから水浴びに行くと、川のまわりは真っ暗で、懐中電灯を持っても周りが見えないので帰るとき迷ってしまう状況だった。

同居：せまいスペースに多くの人が場所を取り合って寝たのは楽しかった。同居をすることで色々な人の生活スタイルを見ることができた。早寝早起きの人もいれば、夜遅くまで外に飲みに出ていたりする人もいた。ただ、夜遅くまで出入りしていたので男女のステイ先の家族に心配をかけてしまった。

水：ナガで生活してみても水の大切さを痛感した。食事の後片付けで食器を洗うときは限られた水の量で軽くゆすぎ、洗剤を落としたりしないといけないので少ない水のやりくりが大変だった。トイレもためてある水で流していたので、水が少ししかない時は焦ったし、それ以降はトイレに入るたびに、まず水があるかどうかを確認してから入る習慣が付いた。また、水が必

要な時、特に夜は水があまり出なかったり、全く出ないことがあって困ることがあった。だから、水が出る時は常に水をためていたのだが、こういうことを通して日本では考えることのない水の貴重さを実感した。



ナガ村での人びとの生活：村の人たちは陽気で音楽が好きで、朝から常にどこかの家から大音量の音楽が流れていた。驚いたのは、家によってだが、カラオケセットがあったことだ。時に村人と一緒に歌ったり、踊ったりした。女の子はダンスがすごくうまかったのだが、彼女たちはカラオケの映像を見てダンスを学んでいた。男の子は、学校から帰るとバスケットボールコートに向かいバスケットをしていた。村人の生活は朝がアップパーとローアー（*1）によって違っていた。アップパーの人たちは朝5時くらいには起きていて、夜9時には寝ていたのに対して、ローアー

ーの人たちは朝6時過ぎに起き、夜10時半くらいに寝るという生活サイクルだった。僕がアップパーの家に行った時、5時くらいにトイレに行きたくて目が覚めても家の人が起きていたから行きやすかったが、ローアーで生活した時は、5時くらいに目が覚めて行こうとしてもまだ家の人が寝ているため、起こさないようにそっとドアを開けようとしても鍵の開け方が分からないので結局家の人を起こさないといけないので大変だった。アップパーの子供たちはローアーの子供たちに比べて学校に行くまでに時間がかかるのは分かるが、ここまで同じ村の人の生活に時間差があることには驚いた。

*アップパー：村の中で山地部分
ローアー：平地部分
↓詳しくは地図を参照。
(坂田 泰則)

キャンプ中の

エンターテイメント活動について

1. エンタメ

まず、「エンタメ」って何？って話なんだけど、今回のワークキャンプにむけ私達は出発前にそれぞれの担当する「係」を決めていて、その中にあったのが「エンタメ」という係。食事係やトイレ係、医薬品係等私達の共同生活には欠かせない生活面のものとは違い、キャンプをより良く楽しくす

るためのエンターテイメントを率先して実行する、というのがエンタメ係りの仕事。「エンタメ」どの係りよりも一番響きがいいと思った私は即決でこの係りを担当することにした。

みんなで出発前に「エンタメ何やりたい？」って話し合った所、まとまったのが二つの案。それが小学校を使って「授業」と

「運動会」をしよう！ということだ。今回初参加の私にとってみれば全く向こうの小学校の想像がつかなくて、「うわぁーこれってホントにできちゃうの？！」という感じ。「ま、いーじゃん。想像つかなくても向こう行つてからなんとなるでしょ」というリピーター達の言葉を聞いても不安は募るばかり。しかし想像つかないものは準備のしようがない！つてことで、日本では「授業」の班分け（日本の遊び班・福笑班・イス取りゲーム班の3チームに分けた。）と「運動会」で使う紅白ハチマキ約200枚だけは用意することにした。

2. 小学校で授業

2月18日キャンプ4日目の午後、私達はティナガンの小学校（ナガ村より約2キロ離れた場所。歩いて約30分）に集まった。子供達の持つパワーは物凄い。学校の近くに着いた途端に子供達に取り囲まれるなり、手をつ

ないだり抱きついてくる。始まる前から多くのキャンパーは子供達の遊び相手となり、なかなか始めることさえ出来ない状態だった。私達エンタメ班も段取りを全く考えずにいた為に、結局LSUに促してもらいう形で各班の授業が始まった。うまくいったところ、いかなかったところ、当初の予定とは内容がズレたところという具合に各班それぞれだった。一通りの授業を終えた後に教室の外（芝生のある広い庭とアスレチック広場）で子供達と遊ぶキャンパーが多かった。

各班の授業内容

①日本の遊び班

班内でまず剣玉・お手玉・縄跳び・折り紙・書道に分ける。剣玉、お手玉に比べ縄跳びは人気が高くて、飛ぶ時の歌もあった。もしかししたら、フイリピンにもこの遊びはあるのかな？書道コーナーでは習字道具が少なかつたせいもあり、みんなで書かずに日本人キャンパーが必死に子供達の名前を書き続けたようだ。「これ書いてもらったんだ！」と自慢げに習字の紙を見せてきた子供が何人かいたけど、こんな苦労があったのね。

② 福笑班

この班に限ってはLSUのリト（いつも話が解かりづらいがやたら話しかけてくれる）が司会進行をしてくれていた。しかし、彼にゲーム内容を伝える段階でのミスでゲーム内容が思わぬ方向に！目隠しはせず（みんな忘れてい

たらしい）黒板にお面を貼って、誰がどれだけ早くカッコイイ顔を作れるか、てな内容に。ナオさん曰く「気付いたらゲーム変わってるし、福笑いなのに笑えない」。しかし男の子も女の子も元気よく手を上げて参加していたようだ。（もう1班あった福笑い班は、カルメロと大輔さんの活躍で大成功だったとか）



③イス取りゲーム班（無題班）

学校のイスが長イスだった為にゲームが出来ない事を知らされていたものの「なんとかなるでしょオケラ（OK）」ということで「無題班」のまま乗り込んだ。急遽イガちゃんの「ソーラン節」、マジック、バツク転、「さんぽ」の歌を教え、個人個人の持ちネタをフルに生かした授業になった。イガちゃんバリエーションに上手く踊る男の子、女の子は恥ずかしがりながらも元気に歌う姿が印象的だった。

3・運動会

当初のティナガン小学校での運動会を予定を変更して（小学校での授業を通して検討した所、子供の人数の多さや広さ、支持の限界等から）3月28日の午後、私達は規模を縮めナガ村にあるバスケットボールコートで運動会を行うことにした。

連日の雨もすっかり上がって最高の運動会日和になった。子供達一人一人にハチマキをつけると、それとなく運動会らしくなる。お母さんもじいちゃん・ばあちゃんも応援に来てくれた。ナガのボスの存在のベティが司会進行の予定だったが、時間になってもベティは現れなかった為（翌日彼女中心に主催するセレモニーの買い出しに行っていた）代わりにLSUのネルソンに司会進行してもらうことになった。それぞれの競技の説明は上手く伝わるか不安だったが、私達が一回お手本を見せると子供達（特に男の子）はすぐに真似して二人一組になって位置につく。一等になった組には蛍光シールをハチマキに貼る事にしたら以外とみんな欲しがり、懸命に競技をしていた。（ズルをした子には勿論あげないので、少しは言うこと聞いてくれたかな？）進行役のネルソンは、説明を補いながら雰囲気盛り上げ、途中からBGMが流れるようになると、これはもう完全に運動会である。手押し車と二

人三脚は二組になるので、子供達が私達を誘ってくれたり誘ったりしていた。ゴール目前になって思いつきりコケる、なんてゆうハプニングも続出した。パン食い競争では、棒にロープでアンパンをつるすのが日本流だが、ここはフィリピン。アンパンの代わりに1ペソパンをキャンパーが手に持ち、スタートした子供達は一斉にパン目がけてかぶりつく。手を使う子にはキャンパーのパンを持っていない手でグーが飛んでくることも（？）。ソーラン節はナガの住民にだいぶ馴染んで来たようで子供達は「ソーラン！ソーラン！」と威勢の良い掛け声で元気に踊っていた。存分に体を動かした後は、完成したウォーターシステムの水を贅々沢に使った「流しソーメン」。なかなか水が流れてくれ



ず、ナガの職人さん達があの手こ

の手でやっとのことで、半分は割った竹に水が通ると歓声が上がった。上から「そおーれそおーれ」とおしやうが麵を流すとワツと箸が竹に集中した。皆覚えが早く、箸を上手に使いこなして自分の獲得した麵をなぜか私達の口に運ぶ。ナガの子供、村人は麵すくい担当で、私達がそれを食べるという図式だ。LSUの皆も箸の使い方をすぐにマスターするがソーメンを口にした瞬間苦しい顔を見ながら「ラミー（うまい）！」と言う姿を見ると、フィリピン人のお口に合わなかったのか



も！？しかしながら、ナガの子供、村人と私たち、LSUとの暖かい交流がここにはあった。私がお腹が破裂しそうな程ソーメンを食べ続けたのも無理もない。

（田中佐代子）

「フィリピンでのフリータイムはこんな風に過ごしました」

①はじめに

僕の事を全く知らないという人は初めまして。一緒にキャンプに参加したから知っているという人は二度目まして。今回フィリピンキャンプに初めて参加させていただいた林 尚徳といいます。キャンプ中は他のメンバーからは「なおさん」と呼ばれてました。ど

うぞよろしく願います。今回のキャンプ報告書では「フリータイム」に関する報告を担当させてもらいます。

説明をスムーズにするために、「フリータイム」をかなり大雑把ではありますけど、2種類に分けてしまいたいと思います。1つは、トラバホー（ビサヤ語で「労働」の意。ここではキャンプ中の吊橋作りやタンク作りの事）が、天候や職人さんが教会に行ったりする関係で無く、他にも特別な予定の無い「日中」のフリータイム。そしてもう1つは、夕食後の「夜」のフリータイム。

「夜」のフリータイムなんていうと、妙な誤解が生まれ、中には卑猥な妄想を抱く人もいるかもしれないですけどまあ気にせず先に進みます。

②「日中」のフリータイム

まずは「日中」のフリータイムから。これは人によって過ごし方はホント様々。今回のキャンパーは全部で19人いたんだけど、も、十人十色ならぬ十九人十色といった感じで。トラバホーの疲れを癒すために家で寝ている人もいれば、海に泳ぐ人も、バスケットボールを楽しむ人もいたり。リピーターの人の中には以前自分が参加したキャンプ



地の友人に会いに行く人もいたり。昼間から酒を飲む人も多分いたんだろうな。正直何をしていたか分からない人もいます。

そんな様々な「日中」のフリータイムの過ごし方の中の一つに、「オルモックに行く」というのがありました。

オルモックというのは、僕達がキャンプしていたナガ村からバスで30分〜1時間位（片道15ペソ。）のところにある街。レイテ島とセブ島を結ぶフェリー、「スーパークャット」が発着する場所で、ナガ「村」に比べればまさに「街」といった感じの場所です。歩行者の服装など見てもナガ村の人達とは明らかに違っていて、同じ島しかもそんなに離れているわけでもないのに、「この差は何だ。」と色々考えさせられました。ここへは村の中の「サリサリ」では揃えられない食材を買いに行ったり、インターネットやりに行ったり。キャンプ⇨シャツもここで作りました。街の中心部には「ガイサノ」と呼ばれる、「スーパーマーケット以上上ダイエー未満」みたいな所があるのだけ

ど、ここで驚くのは品物の豊富さよりも、従業員の数の多さ。ホント無駄に多いです。そしてレジ



の女の人は笑顔が全く無いです。

「さくらや」だったら多分働けないと思います。

僕は結構オルモックに行っただ

ですけど、買い物を終えて、ハイウェイでバスを降り、ナガ村までの約20分ほどの砂利道を歩く途中に見た夕焼けは、めっちゃきれいでした。その時撮影した写真を現像してみても見たのですが、やっぱりマイチでした。普段デパート地下食品売り場でバイトしている自分にとっては、他のキャンパー以上に新鮮に映ったのかもしれない。

③「夜」のフリータイムとその1

日本人同士で熱く語り合う夜もありましたが、ミーティングなど特別な用事がなければ、基本的にはみんな村の各家庭に飲みに行っていたようです。中には行った先の家でそのまま宿泊し、次の日の朝食の時に男子部屋に戻ってくるなんて強者もありました。僕もリピーターの人に連れられて色々な遊びに行っていました。次の日もトラバホーがあったり、恥ずかしい

話なんですけど、ナガ村に着いて3目の夜に寝下呂（ねげろ）をしてしまい（その日はとある家庭で飲んだんですが、僕は何杯も酒を一気飲みし妙なテンションになり、その場にいた人もみんなお馬鹿さんなテンションでくだらない事で笑ってました。男子部屋に帰宅し、就寝。翌日、男子部屋のお母さんは起床した僕に、「あんた昨夜はかなり酔っ払っていたね。床、掃除していたから。」と言いました。僕の左肩には妙な染みと、人參の残骸。ただただ彼女に謝りました）、それ以来若干酔っ払う事に臆病になっていた事もあり、そんなに飲みはしなかったけれど、相手によっては英語がそれなりに通じて、しらふでも十分楽しめました。

ちなみに僕がナガ村の人と酒を飲んだり喋ったりするときは、1、何を話したらいいか分からないけども、黙らずにとりあえず思いついた事を喋ってみる。

高校生英語の知識をフルに活用する。相手の反応が微妙なものだったら、笑ったり歌を披露してごまかす。

2、彼らが起こした行動に対する自分のリアクションはオーバーに、分かりやすく。

3、言葉ではなく気持ちを伝えるといった事を心がけていました。

④「夜」のフリータイム

（その2）
今回キャンパーが村に到着したのが

ちようどバレンタインデーだったんですけど、その日も含めると4回、村のバスケットボールコートで「デイスコ」がありました。5月に開催される「フイエスタ」というお祭りの資金集めも兼ねているらしいんですが、デイスコが行なわれる日は、夜遅くまで大音響でスピーカーから曲が流れ、小さな子供も「おい、そろそろ家に帰った方がいいんじゃないか。」といったくなるような時間まで踊り続けていました。「ブラック・ラック」、「スパゲッティ」、「オチョ・オチョ」が流れば（いずれもガイサノや家庭のラジオでよく耳にした曲で、当時流行していた曲）、ナガの村の人はすこぶるご機嫌で、特に女の子なんかは笑顔、笑顔。逆にHIP HOPとかはあまり好きでないらしく、流れていてもつまんなさそうな顔。いやあ、分かります。それはともかく、フイリピンの子達は何とセクシーにダンス踊る事か。誰に教わったわけでもないだろうに、14歳とか15歳にして、すでに安室やMAXを彷彿させるような腰の動き。くねくね。顔もみんな大人びていて、加護ちゃん、辻ちゃん、小倉優子みたいな顔をした子はどこにもいない。「デイスコ」の度に「ああ、日本はロリコン社会な



んだ。」とつくづく感じさせられました。まあ、何はともあれ「シヤツの色が汗で変わるくらい僕も楽しめたから「良し」とします。」

⑤最後に帰国してから感じた事なども含めて、

今自分は大学時代の仲間と劇団をやっている、卒業してからのフリーター生活ももうすぐ3年目になろうとしています。そんな自分は偶然にもこのキャンプの存在を知り、「自分を変えたい、変わりたい。」という気持ちで応募し参加したんですが、このキャンプを通じて出会えた全ての人に「サママー。」（ビサヤ語で「ありがとう」の意。）と言いたいです。

出国前はお互い面識の無かった人間同士が、たった3週間の生活でこんなにも深い絆を築き上げられるとは思いませんでした。こんなにもみんなの事を好きになれるとは思いませんでした。

今回初参加したメンバーの多くは20歳前後の人が多かったのだけれども、彼らの表情が日増しに変化し、成長していく様子は見ていて気持ちよかったです。ミーティングなどの場で、自分の意見を言うのが苦手だった子が自己主張できるようになった、そういった成長もキャ

ンプ中、随所で見られました。

帰国してから今回のキャンプ活動を振り返って、色々考えさせられました。いまだに答えを導き出せない疑問を抱えていたりもします。ただ自分に今出来るのは、このキャンプの経験を色々な人に伝え、そして次回のキャンパーにつなげる事だと思っています。

報告書というか、何か感想文チックになってしまった感はあるかもしれませんが、僕達がフイリピンで過ごした時間に触れたような気になってくれればこれ幸いです。（林 尚徳）

ホームステイ（1）

三週間のうちの間の一週間ホームステイをしました。各家庭には男女別に日本人キャンパーと一緒にLSUのメンバーも混ざって1人または2人で入ることに決まりました。しかし、村人にビスカの受け入れを拒否されてしまいました。

スタッフ、LSU、村人で話し合った結果、2軒は受け入れを承諾してくれたのでその家庭ではLSUもホームステイを行い、残りのビスカの人達は別の場所で滞在してもらうことになりました。

ホームステイをすることは、現地の家庭の日々の暮らしの中に入り寝食を共にします。日本人だけでの共同生活だけでは体験できない



いである。異文化を体験したり、コミュニケーションをとって交流したりすることが出来ます。各家庭によって対応の違いがあるのは当然だし、環境も違いました。例えば、水道や井戸が家にあたりするのに対し、近くの水道まで水を汲みに行って家に貯め置く家もあります。寝る所もベッドがある家もあれば、家族全員で雑魚寝する家もあります。また、一部のステイ先では食事が自分だけ一品多いといった特別な待遇をもらった家もあったようです。

ここからは私のホームステイのことを書きます。私のステイ先では特別扱いもなく、いつもの日常生活に加わった感じで、食事や家族と同じものをみんなと一緒に食べました。ごはんやスープが基本でたまに魚が出てくるという現地の一般的な家庭の食事、モンゴ豆のスープやコナツツスープなどフイリピン特有のものも食べるこ

ができました。寝る場所も1つの部屋に家族全員で雑魚寝をしました。

ただ、私のステイ先はサリサリでカラオケもあり人が集まってくる場所だったので、賑やかなことが多かったです。だから色々な人と知り合えました。最初はビサヤ語もほとんどわからないし、英語もペラペラではないから大丈夫なのかという不安や心配がたくさんあったけど、実際に家庭に入ったらそのような不安はなくなり、たどたどしいビサヤ語と英語やジェスチャーで意外と交流もできました。難しい話はできませんでしたが、簡単な日常会話には困らなかったと思います。ステイ先の家の近所には子供がたくさんいて常に子供達と一緒に遊んで囲まれていたもので、いつも楽しく過ごすことができました。

ホームステイをしてみて、ナガでの生活をより理解できたと思います。日本の現在の生活とは考えられないほど違った生活をしているのをも身をもって感じました。しかし、村人達はいつも笑顔で日本人より生き生きとしているように見えました。生活の豊かさは多くの人々が望むことだと思いますが、豊かさや欲望を追い求めて笑顔や人間らしさ、人の付き合いを無くしてしまっているのではないと思います。そのようなことを考えさせられるいい経験にもなりました。ありがとうございました。

(稲垣 彩)

ホームステイ(2)

私がホームステイした家の家族構成を説明すると父、母、そして双子の姉妹と兄が1人いる家族だった。父は職人でありよくワークに顔をだし、一緒に働いていた。母は一般的な主婦で、毎日家事をこなしていた。私がホームステイ中に風邪を引き、寝込んでいたときは昼にマギーを作ってくれたり、何回も「OK?」と片言の英語で心配そうに声をかけてくれたやさしい人である。そしてこの家族の中で1番よく話したのが双子の姉妹だった。ワークから帰れば毎日のように遊びに付きあわされ恋の話や、日本の話、フィリピンの話など毎日のようにくだらない話をしていた。しかしこの会話のおかげでいろいろなビサヤ語をおぼえることができ、この双子には感謝したい。生活面は簡単に述べるとほぼ毎日飲んだくれていた。ワークが終わり水浴びをして家に帰り、少し話した後に夕食を取り、そのあとは毎日飲み会だった。近所の人々も家族と飲



むこと

も多かったが家族とがもろろん多かった。テラスに全員集合し、毎晩毎晩話し込みながら飲んでいった。これは本当に楽しかったし私も家族の一員になったような感じだった。予断だがホームステイ初日に飲んでいるとき父親が何度も「明日テレビがくるんだ!」と何回も言ってきたので期待して待っていたのに、にただ酔っ払っていただけだったとわかったときはさすがに笑うしかなかった。このような感じで、毎日生活していた。

ホームステイをして一番感じたことは、家族の大切である。先ほども書いたが、ホームステイした家の家族のほぼ全部の家が、夕食取ったあとで家族全員で集まり、家族だんらんをしている。僕もホームステイした家でだんらんに混ぜてもらったが、とても居心地がよく、まるで家族の一員のように接してくれて、心からうれしかった。僕は日本ではあまり家族と察していなかったが、この経験を通して家族の暖かさ、やさしさを学び、大切にしていきたいと思った。(米川 晃司)

LSUの学生を交えて

ここ最近のフィリピンキャンプは新企画好きである。2003年夏のキャンプでは、一週間、村の各家庭でのホームステイを実現さ

せた。今回はLEYTE STATE UNIVERSITY(キャン



ら徒歩20分バス30分程のところにある公立の総合大学。レイテ島でのキャンプに参加したこ

人にはVISC Aの名称の方が馴染みがあるだろう)の学生たちをキャンプメンバーに迎えた。

この企画は、リーダーの「(現地の学生と)共にワークをしたり、しゃべったり、酒を飲んだり、騒いだり、時には議論を試みたりすること自分たちの活動をより客観的にとらえてほしい」(フィリピンキャンプ2004パンフレットより)という考えから実現に至った。

この企画の実現にあたっては、キャンプ下見の段階でキャンプ地の近くに住んでいる知り合いのLSUの学生にメンバーを集めてくれるように話をつけた。またLSUを実際に訪れ、大学の教授にキャンプの話をし、学生に呼びかけてもらうようにもお願いした。

(しかし、大学教授とはその後、連絡が取れなかった)キャンプでは5人のLSU学生と寝食を共にし、数人の学生が毎日のように

キャンプ地に通ってきた。

ワークや食事、川での入浴やエンタメ、バスケット等。キャンプ中のあらゆる場面で日本人キャンパーとフィリピン人キャンパーが交じり合い楽しんだ。

ワークではスコップを自分のからだの一部であるかのごとく上手に使いこなしたり、砂利が大量に入ったセメント袋を楽々と担いだりと自分のマツチョさを女性陣にアピールしていた（かも知れない）。また、休憩中などは日本語・ビサヤ語を教えあったり、労働の為に燃料（トウバ）をついであげたりつがれたり。

食事では、一緒に料理したり、LSU学生が作った料理に舌鼓を打ったり、日本人キャンパーの作った不思議な味のスープを飲ませてみたり。ホームステイでは、一部の村人がLSU学生の受け入れを拒否し残念ながら全員が体験することはできなかったが、なかにはステイ先のお父さんとお酒を飲んで語ったり、日本人キャンパーと将来の夢について語りあったりしたメンバーがいた。

私の中では、フィリピン人キャンパーのボス的存在であるネルソン、いい人なんだけど話が長くてイマイチ話がよくわからないリト、たかちゃん、のモノマネをことあるごとに繰り返してみんなの笑いを取っていたカルメロが印象深かった。

今回の企画は初の試みであったこともあり、LSUキャンパーの参加費のこと（フィリピン人キャンパーに

は、お金をさせるとなると参加者が集まらなくなることを懸念したこともあり、お金を出してもらわなかった。しかし、この企画を

続けていくなら今後どのようにすべきか話し合う余地あり）や、村人への説明不足（下見の段階でナガの村人に対して、LSUの学生をキャンパーとして迎える企画があることをきちんと伝えなかった。またLSUの学生が所属している団体に関して悪い噂が村で流れていたためにホームステイをするさいにトラブルとなった）が問題としてあった。

しかしながら、日本人だけでなく現地の方々達と共にコミュニケーションの問題の解決に取り組んだことは大きな意味があったのではないかと。今後、現地の学生が組織化されフィリピンキャンプを主導していくようになれば、レイテの未来は明るい。

（潮田広行）



キャンプを振り返り

自由時間を通して

名前の通りに自由時間であった、キャンパーそれぞれで違うと思う。

自分は時間が空くとよく川で水浴びをしていた。フィリピンで過ごしている僕らキャンパーにとつて水浴びは、日本での風呂に当たる。もちろん常夏なので、昼間ならいつ入っても気持ちがいい。ワーク直後たいていは数人で行くのだが、朝やお昼などは一人の時が多い。そのときに、日本にいる同年代の友人たちのことを思い出す。

「こういう現実があることを言葉じゃなくて実際に見せてあげたいなあーって。

ここナガ村では山からの水源の水がすべてで、その水源からの水が飲み水になり、川では洗濯水にもなり、お風呂にもなる。人間が生きていく上で当たり前のことだが、想像するのは難しい。

この報告書を読んでくれた人には是非とも、ナガ村での生活を味わってもらいたいものです。

（吉田 亮）

日本に帰ってから振り返って

フィリピンでの生活を終えて、今常々感じることは、もう一度行きたいということだ。あるキャン



パーの言葉を借りれば『フィリピンシック』、まさにその通りである。今回のキャンプ地ナガに到着して、東京では見かけないコナツツの木を見たとき、フィリピンに来たのだという実感がわいた。子どもたちはとても人懐っこくていつでも回りに集まってくる、一緒に話したり遊んだりいつも笑顔を見せてくれた。そんな子どもたちのかわいらしさ、フィリピンナ・フィリピーノは本当にやさしいということ、人との交流がやはり一番印象的に残っている。毎日何かあって、夜は日本では見られないほど多くの星を見たり、ワークの後には海に行き泳いだり、そこで見た夕日は本当にきれいで感激だった。この20日間が、ずっと続いてほしいと思う毎日だった。また、今回出会ったすべての人に会いにきたい。

（土屋 美夏）

ナガ村 村人紹介

☆ロクロク：職人



2000年夏のアン
ティポロのキャン
プから参加。以前
はロクロクの兄が

手伝ってくれていたが亡くなったた
め、弟のロクロクが手伝ってくれて
いる。水道タンクや橋の設計は彼に
よるもの。休憩時間やワーク終了後
にはみんなに、マジックを披露して
いた。ネタは豊富。陽気な感じで、
とても優しい。仕事も丁寧に教えて
くれた。

☆ティータ：



ロクロクの妹で、
ティナガン小学校
の先生。最初のレ
イテ島のキャン
プから、下見とか先
発の時間にお世話に
なってる人で、今回も生活用品等を
預かってもらっている。エンタメで
も色々協力してもらった。

☆プーニャン：



ティナガン村ナガ
地区の一番偉い
人。カルロス邸の
サリサリの裏に住
んでいる。

☆エディ：村人

村の職人代表として、ロクロクの



代わりにワーク
の現場を仕切る
こともあった彼
は、普段はあま
り話さない縁の
下の力持ち的存在。仕事熱心。と
ても優しくて、ときおり見せる笑
顔が素敵。

☆ベティ：ディケアセンター（幼稚園）の先生



村で唯一大学を
でている。英語
が堪能。タガロ
グ語を英語に訳
してくれるの
で、日本人と村人との間に入って
色々手を貸してくれた。

☆ナナイビータ：女子部屋のお母さん



天使のように優
しい人。部屋を
掃除してくれた
り、雨が降った
ときは洗濯物をとりこんでくれた
り、いろいろな面でキャンパーを
気遣い、助けたくれた。

☆イハラス家：男子部屋の家族



短髪で、どーんとかまえている

感じのお母さん（ティナガンのあ
る家庭で家政婦として働いてる）
と主夫のお父さん、マリー、アン
ジの4人家族。色々よくして頂
いた。

☆ナナイアニー：



下のナガに住ん
でいて何かと面
倒を見てくれる
お母さん。ワー
クに必要な備品
貸してくれた
り、夜ご飯に誘ってくれたりし
た。よくしゃべる。個人的にお世
話になったことを言うと、誕生日
パーティーのときに、おいしい料理
をたくさん作ってくれた。

☆ロロイ：村の青年



日本語を覚える
ことに熱心で、
たくさんさんの言葉
を知っている。
特に恋愛に関す
る言葉が多いけど。ワークの現場
では面白いことを言って場を和ま
せてくれていた。実家はサリサリ
を経営している。いつもプラプラ
している彼は、日本人みんなと仲
良しだった。

実はKATO（ショベルカー）を操
縦できるすごい人！橋を作るとき
には、KATOで手伝ってくれた。

（間山 桃子）

LSU 紹介

NEISPN（ネルン）



LSUのリーダー。村人・LSU・キャン
パーの間にたち調
整してくれた頼り
ある存在。年は一
回りほど上だが、
お腹を除いて、あ
まり歳の差を感じさせなかった。

CARMILLO（カルメロ）



いつも不安な顔をし
ていたが、実はすご
く楽しい奴。とあ
る日本人キャンパ
ーの真似がうまく、
いつもみんなを笑わせていたひょうき
ん者。笑顔がかわいい！

JUN-JUN（ジュンジュン）



外見では少し近寄
りがたい雰囲気
を醸し出していた。
が、一度お酒を飲
んで踊れば、すご
いハイテンション。
タバコとサングラ
スがよく似合うクールガイ。

ATOR (アトー)



積極的にワークに参加し、村人とも交流していた姿が印象的。その姿に加えて彼のやさしい笑顔で、ひそかにフアンの女の子も多かったかもしれない？

ABORCE (アボージ)



キャンプ中、髪型が3度も変わったオシヤレ(ニ)さん。しかし、鳥を素早くさばく姿は勇ましかった。ギターと歌を歌わせれば、彼の右に出る者はいない。

LITO (ニー)



ビサヤ語なまりの英語を駆使してキャンパーと積極的に交流する姿が印象的。多少聞き取りにくかったが、一生懸命話そうとするその姿勢は見習いたい。

JOJO (ジョジョ)



ネルソンに次いで年上の彼はさすがに落ち着いた雰囲気でもワークも真面目に取り組む。しかし、デイスコでは、自ら進んで輪の中で踊るなど若さ溢れていた。

EMANUEL (エマニエル)



ジュンジュン同様、クールガイ。しかし、みんなのことをさりげなく気遣ってくれた優しい人。彼の家には多種多様な動物が生息し、まるで動物園のよう。

GERRY (ゲリー)



いつも頭にバンダナをしていた個性ある彼は、子供のような無邪気さと笑顔を持つ。キャンパーとよく話し、冗談を言い合っては笑っていた姿が印象的。
(柳沢 晶子)

スタッフを終えて

今回でキャンプは2回目。前回、海外もワークキャンプもトイレの紙がなくて手ですませたのも、何もかもが初めてで全部が新鮮だった。ワーク目的で応募した私は、ただひたすらパイプをうめる穴を掘って掘って掘って…とあえず掘っていた。日本に帰ってフィリピンに行つてよかったと思つたのは、体重計にのつた時だった。20日間で4kgのダイエットに成功したのだ。「キャンプについていいかも…」そう思った。もちろん、キャンプ中穴とばかり向き合っていたわけではない。子供と一緒に木登りやダンスレッスン、キャンパーとキャンプトークや恋愛トークと他の事にもちゃんと関わってきた。前回のキャンプは、自分より年上の人が多く、いろんな面で頼っていた。キャンプ自体は楽しかったが、ただ楽しいだけで終わってしまった。初めての海外で貧しい生活も体験し、自分とはまったく違う人と関わり生活をして、新たな発見ができた自分でも少し成長したかなと感じた部分があった。しかし、キャンプ後にキャンパーからキャンプに対しての様々な意見を聞き、ただ楽しんでいただけのキャンプで終わるのはもったいないと思った。もともとと積極的に村人やキャンパーと関わって、キャンプを見つめ直そうと思った。そして、思い切

ってスタッフをやることを決心した。周りからかなり勧められたというのもあったが、人を引っ張っていく役を今まで経験したことがなかったもので、挑戦してみたかったというのもあった。生活係を担当することになったが、生活の仕事は広く、キャンプが始まってからも何が自分の仕事なのか理解できないでいた。

今回のキャンプ地は、前回お世話になっていたので、村人はすんなりと私たちを受け入れてくれた。新キャンパーもすぐに村の人と仲良くなることで、また、リピーターが前回お世話になった所に他のキャンパーを招待してくれたので、交流の幅はますます広がった。今回のキャンパーは、みんな積極的に活動的な人が多いように感じられた。共同生活ということ忘れて、夜遅くに帰ってきたり、朝帰りや家の人を心配させたり、キャンパーを困らせたりとマイナスな面もあったが、活動範囲が広く様々な場面に合っている、多くのことを経験できたのではないだろうか。ホームステイでは、日本の遊びを教えたり夜遅くまでタイやナナイとトゥバを飲んだり、各家庭で充実した生活を送っているようだった。スタッフは各家庭を回ろうと考えていたが、食事準備も何もしなくていいという環境に、スタッフということをついつい忘れてしまいい軒も回ることなく終わってしまった。普段の生活でも、特別にスタッフとして何をしていただけてもなかった。スタッフの仕事は、自分で見つけてやるものばかり



だったの
で、周りに
目をやるこ
とがあまり
得意でない
私にはなか
なに見つけ
ることがで
きなかつ
た。いつも

与えられたことをやっていて、与えられたことですらきちんとできていなかった事もあった。自分で仕事を見つけないことは、とても難しいことだと感じた。今回のキャンプでの自分の目標は、「積極的に」だった。自分が気づいたことでほんの些細なことだけどキャンパーをサポートできたところもあった。また、それを心がけていたことでキャンプに対する姿勢が前回とは異なっていた。スタッフとしてだけではなく、キャンパーとしても広い範囲で村人と関わる事ができた。ビサヤ語も勉強し、少し話せるようになったので、自分から話し掛ける事ができた。いろんな年代の人と関わる事ができた。

今回のキャンプを終えて、前回とは違うカタチでナガに関わり感じ、楽しむことができた。その反面、反省する点も多数あった。今後続けた方がいいことや見直す点・考えなければならぬ点など新たな課題も生まれた。私自身もまだまだなっていないところが多く、未熟なままキャン

プは終わったが、スタッフをやったことで得られるものがあり、ほんの少しだが自信がついた。キャンパーもワークやナガでの生活で水の大切さや貧困について学び、いろんなことを感じる事ができたのではないだろうか。ナガを出発する日の最後のミーティング、キャンパーの言ってくれた言葉や個人個人のキャンプでの成果を聞き、スタッフができてよかった。今回キャンプに参加できて本当によかったと思えた。また、ワークも無事完成し、ナガの村人に喜んでもらえることもできたので、「オケラアなキャンプだった」と思いたい。

ほんとにいい経験ができました。今回スタッフができてよかったと思います。ありがとうございます。Salamat ☆
(矢田 祐美子)

フィリピン人と日本人とお金 〜キャンプを振り返って〜

2003年の夏キャンプでフィリピンに発上陸。そこで人々に、国に魅せられた。自分の目・耳を通して、様々な問題にも触れた。たくさんのかたちを感じ取り学んだ。そしてまたキャンプに参加したいと思った。前回は表面的な関わりしかできず、消化不良だったため、今回はもっと深く関わりたいと思った。そしてその手段とし

て、推薦されていたこともあり、STAFFという立場を選んだ。その中で会計という役職を選んだのは、元々ケチ気味(笑)というのもあったが金銭という面でフィリピンという国での生活を客観的に見たいと思ったからだ。もっと貧困問題を考えてみたかった。

あまりにも大きな日本との物価の違い。お金に対しての感覚の違い。すこし頑張れば、日本では稼げてしまうような金額でもフィリピンに持つていってしまえば大金になる。だから日本人は、ここにくると金持ちになる。いわゆる豪遊ができるのだ。フィリピン人も日本人といることで、なかなか口にするのできないものを食べられたりと、おいしい思いが出来る。それが当然のようにねだるフィリピン人もいる。

日本円で考えるといたしたこと



無い金額なのに、なぜか抵抗を感じてしまう。フィリピンの金銭感覚に染まってしまうから？もちろんそれもある。が、それ以外に文化の違いもある。日本では、ちよつとしたとき菓子折りを渡す習慣があるが、フィリピンではそれがお金なのだ。少しでも裕福な人が、貧しい人に『お金』という手をさし伸ばす。そういった習慣がある。

また、キャンプ中に何度か「ギブミー マニー」と言われたことがあった。あげはしなかったが、初めてその言葉を聞いたときは、とても驚いた。あまりにも露骨すぎたから。けれど子供は正直だから、思いをそのまま口にしたのだろう。現実にはこういうことはあるのだ。以前会ったときからたった2ヶ月しかたつてないのにやせてしまっている子供たちがいるような村だから、問題は深刻なのだ。貧困という二文字が影をさしている。避けては通れない、解決の難しい大きな問題。

ワークキャンプは村にちよつとした特需を与えると同時に、刺激を与えてきた。外の世界を知るきっかけ、裕福な生活にあこがれるきっかけ。たくさんのかたちをこれまでのキャンプで、ワークと一緒に与えてきたと思う。私はそれがプラスに働いてくれることを願いたい。くわえて日本人側も、もっと村人の生活の根本を見なくてはいい。もっと貧困問題に向き合ってほしいと思う。今回のキャンプでは、楽しさが前面に出すぎてそういった面が隠れてしまった感があった。日本人・フ

イリピン人、お互いよい関係を保ちつつ、有益なキャンプがこれからも続いていって欲しいと思った。

(飯高 かすみ)

リーダーとして2004年春フィリピンキャンプに参加してみて

今思い起こすと、前回のキャンプはただただ、慌しく過ぎていったという感じです。キャンプ中は、毎日やることに追われて一日が長く感じられましたが、終わってみると本当に早かったです。

以前話したことと重複してしまうことを最初にお詫びしておきますが、私がフィリピンキャンプに参加したのは、自分探しの一環でした。そして、スタッフをやるうと決めたのは、このキャンプを先につなげていきたいという思いからでした。そして新しい試みとしてLSUの学生を招待するというもおこないましたが、いかがだったでしょうか。

当初、私は堅く考えすぎる性格のせいか、様々な不安を抱えていました。彼らが馴染めるかどうか、一緒にワークをするという意義をわかってもらえるだろうか、またナガの人の理解をどうしたら得られるか……。けれども、私の心配をよそに、キャンプのみんなは本当によくやってくれたと思います。むしろ自分に余裕がなくて、本来自分をもっと配慮すべきだったのをみんながフォローしてくれて、感謝してます。



ワークもトラブルなどあったけど、無事出来て本当によかったね。小学校での運動会も、大変なことになっていたけど、思い起こせば楽しい思い出です。

リーダーをさせてもらったというのは、大変いい経験になりました。人の上に立つ、って言ったら図々しいかもしれないけど、みんなを引っ張っていくことの難しさを身を持って体験することができました。

やっぱりキャンプに参加したことで得た最大の収穫は、自分を客観的にみつめられたということですね。日本という国から離れ、大学生という身分から離れ、フィリピンの人々と接してみてもっと他人に訴えるものが自分にあれば、と何度か思いました。肩書きなんて抜きにして、人間的な魅力のある人になりたいですね。

よく、フィリピンに行つて、サ

バイバル生活を送ってきたと知人に話すと、「よくそんな所に行くね」という反応が帰ってきます。でも、そういう反応をされたときに自分が必ず相手に伝えるのは、「地球的規模から見たら、そうした生活が標準であり、日本ほど恵まれている国は稀なんだ」ということです。そういう事実を私たちは知っておく必要があるし、また知ることによって、世界のことをより柔軟に受け止められるようになると思います。

今は会社員となつて世の荒波に揉まれている私ですが、初心貫徹で、今のこの気持ちを忘れないでいたいと思っています。忘れそうになったときは、みんなに救いを求めるので、ぜひ付き合ってください☆

ではでは。多謝。

(尾村沙矢佳)

フィリピンワークキャンプ報告

2004年6月

2004年6月1日発行

フレンズ国際労働キャンプ

(FIWC) 関東委員会

執筆：2004年春フィリピン

キャンプ参加者一同

表紙：間山 桃子

地図・編集：飯高 かすみ